

団塊世代にプレゼンする「日本再発見」

歴史の町並みを歩く

米山淳一

第35回 南海の孤島 出羽島の町並み

丘に上がると出羽島の漁村集落が一望のもと 画面右端に津波避難(タスカル)タワーが見える

はじめに

「島の漁村なんかどう？」と宮原編集長からリクエストが飛んできた。国の重要伝統的建造物群保存地区で島となると、思い浮かぶのは塩飽本島町笠島(香川県丸亀市)だが、漁村はあるが塩飽水軍や瀬戸内廻船の拠点となった港町として繁栄した町だから今ひとつしっくりこない。沖縄県の竹富島(石垣市)や渡名喜島(渡名喜村)は島の重伝建地区には違いないのだが、むしろ赤瓦の農村集落景が保存地区になっているから、これらも当てはまらない。

そこで閃いたのが出羽島(徳島県牟岐町)である。平成29年2月に重伝建地区に選定されたばかりで、正真正銘の島の漁村集落だ。以前から訪ねてみたい町並みの一つだったが、感染症拡大で断念していた。島には診療所がひとつと聞いていたから町役場に近況を聞いてみた。すると「今は大丈夫です。今日は雨、明日は晴れます」とのご担当の前原健太さんの軽やかなアドバイスに安堵し、出羽島行きを即決。翌朝一便の徳島空港行きを予約した。

資料を見ると出羽島は、牟岐町の牟岐港から3.27km、南北982m、東西625mの小さな島である。島の南部が小高い丘で、北部に傾斜したその裾に位置する、天然の良港を囲むように漁村集落が続いている。江戸期以前にも居住の痕跡が見られるが、島の発展を生んだのは江戸中期からの移住である。それは豊かな漁場の確保を目的としたもので、明治、大正、昭和初期には、カツオ・マグロの漁場として

大いに賑わったのである。一時は約150戸を数えた。大正期をピークに漁業は衰退。それとともに人口も減少していった。以後、島は鄙びた漁村といった感じで、釣りやダイビングなどで知る人ぞ知るような存在となった。四国といっても瀬戸内ではない。室戸阿南海岸国定公園のほぼ中央に位置する牟岐町沖の太平洋上の孤島である。急に冒険心が湧いてきた。島の漁村の文字にも惹かれ、未知の世界への旅に胸が高まった。

船便は1日6往復

羽田発7時10分の徳島行きはボーイング737形よりも小ぶりのジェット機で初搭乗の機種だ。ひょいと離陸して急上昇。約1時間で徳島空港着。路線バスでJR徳島駅へ直行したが、道路渋滞で牟岐線の列車にギリギリセーフ。乗り遅れたら次は2時間後だから船便との接続が難しくなり、取材は根底から崩れ去るのである。出羽島への船便は牟岐駅に近い牟岐港から1日6往復しかない。鉄道も渡船もローカル仕様なのである。

牟岐線は未乗路線。一生縁はないと思っていた路線なので、乗車できるとなればなんだか嬉しい。と言っても徳島駅から牟岐駅まで普通列車で約2時間。しかも1両編成。おまけに平日なのに通路まで満員。なんとご老人とご婦人の散歩会グループが2組も座席を占領し、降りない。海沿いの車窓を楽しみにしていたが期待薄。やっと思い通りに着席できたが、今度はなかなか海が見えない。阿南駅を過



南国的な雰囲気の出羽島駅舎 国鉄時代のまま



長閑な時が流れる牟岐港 左の岸壁の向こう側が「大生丸」 「大生丸」の船内は顔見知りの客ばかりでサロンのよう

▶「出羽島に賑わいを取り戻したい ぜひ来てください」とアピールする前原健太さん(牟岐町教育委員会文化財担当)



ぎてから田園を抜け、山間に入ると木々の葉が陽光に光り輝いている。ヤブ椿や椎の木等の照葉樹林が沿線に多く、南国を感じる。田井ノ浜(由岐～木岐)辺りで白砂と青い海にご対面となったが、それもつかの間、また山間に入り、峠を越え牟岐駅に到着。線路を渡って待合室に入るとそこには、昨日お電話した前原さんの姿があった。

「本当に来ましたね」と驚いた様子。「いや、あなたのご案内が上手だったから」と僕は照れ笑い。国鉄時代の駅舎の待合室で懐かしいブルーのプラスチック椅子に腰掛けて出羽島のお話を伺った。まずはこれと言って、出羽島のパンフや伝建保存対策調査報告書を手渡してくれた。分厚い調査報告書には、増井正哉先生(奈良女子大学教授)や「阿波の町並み研究会」などの懐かしいお名前を見つけた。その道のプロが太鼓判を押した出羽島の漁村集落である。

前原さんからはかつてカツオ・マグロ漁で繁栄した話を皮切りに、移住で漁村集落が出来たことや遠洋漁業の基地等、生き生きとしていた頃の出羽島の生活文化を知ることが出来た。現在は？となると前原さんの顔が一瞬曇った。それは、人口減少に伴う過疎化と空き家の増加である。せっかく重伝建地区になっても活気がないと言うのである。芸術祭やイベントを開催しても一過性。若者は少なく、ご老人ばかり。定住して欲しいとの願いがひしひしと伝わって来た。町並みの特徴や撮影ポイントなども矢継ぎ早にお伺いするとまた、笑顔になった。最後に「お土産はありますか？」と尋ねると、かたわらの布製トートバッグを指さした。「出羽島帆布のバッグです」と、愛用の地場産品である。若い夫婦が伝統的町家に住み付いて製作、販売していると言う。僕はこのいきさつを聞いて嬉しくなり、お土産にこれを買うことに決めた。

駅務室からお昼の時報が聞こえてきた。渡船は13時30分

である。前原さんに港までご案内いただきながらお勧めの昼飯処と居酒屋を聞いた。昼飯は、港近くのキウチ食堂、居酒屋はその手前の「英」。早くも地元情報を仕入れることが出来、ひと安心。定食屋のような店構えのキウチ食堂に着くと向かいには牟岐町役場だった。なるほどである。

ガラス戸を引くとご婦人が二人、麺をすすっている。テレビは、お昼のNHKニュース。なんとDMV(デュアル・モード・ビークル)のことが流れ始めた。すると奥から出てきた女将さんもお客も、「アレだ」と言った感じでテレビを見上げて話し始めた。阿佐海岸鉄道に12月25日から導入されるDMVは、地元では注目の的。北海道の夢が南国で花開くなんて素敵だなと思いながらオムライスを注文した。

いざ、出羽島へ

DMVや地元の話題に混ぜてもらい、盛り上がった。牟岐港は暖かい日差しに包まれ、のどかな漁村風景が展開している。ふと港の左手岸壁に目をやると、その陰に漁船よりも一回り大きな船が停泊している。近づいて分かったのだが、岸壁の向こう側は海ではなく牟岐川の河口。港の岸壁を幅1mほど欠いたような隙間が、出羽島行き渡船「大生丸」の乗り場である。乗船には早いからベンチでひなたぼっこと決め込んだ。人が次々にやって来て乗り場にたむろし始めた。あわてて僕も乗り込んだ。船内は、簡単な座席と客船らしく小さな棧敷が二つ設けられている。客は靴を脱ぎ、話し込んでいる。

時間になると「大生丸」は、エンジン音を響かせて牟岐川河口を右に大きく旋回、舳先を南に向けた。目指すは出羽島。港の防波堤を通過するやいなや一段とスピードを上げ轟音とともに太平洋に滑り出した。群青色の外洋に真っ白な航跡を残して突っ走る。



出羽島の漁村風景 神社の松の古木が印象的



南国を思わせるハイビスカスの花



出羽島の自家用車「ネコ車」



「ミセ造り」の町家が多く見られる西波止の町並み

沖に出ると波はうねりに変わり、「大生丸」は大きく上下にピッチングを繰り返す。波しぶきを避けながら、後部デッキで右前方を見ると真っ黒な小島が見える。出羽島だ。グングン近づいてくる。迫力満点の船旅は、約15分。防波堤の前で減速、古めかしい石積みの防波堤を横目に静々とタコ壺のような出羽島漁港に入った。そこは、瓦屋根を載せた民家がひしめく紛れもない島の漁村だった。

島の生活文化は独特

「大生丸」が港に着くと島のみなさんが集まり、一時、港界限は賑わいをみせた。それも束の間、人は何処かに消えて、いつしか僕はひとりになった。まずは、出羽神社にお参りをしてからまち歩きを始めた。港がある場所は西波止の西部である。ここには郵便局や診療所等公共施設が並ぶ島の玄関である。郵便局近くで真っ赤な美しい花を見つけ

た。なんと、ハイビスカスだ。澄み切った青空を背景に咲く姿は、さながら奄美や沖縄の島々を思い起こさせる。出羽島は黒潮が流れる温暖な気候なのだ。

神社を過ぎるとその先が西波止東部そして本町、小さな港沿いに新町、洲鼻東、さらに島の西側の洲鼻西へ細い道が続いている。これが、出羽島の町家筋を貫く主要道である。これに交差して、堤防や港に通じる路地が発達している。島では、路地を「アワエ」と呼び、生活路として今も生きている。主要道といっても自動車が通行できるような道幅ではない。いや、自動車がないのである。その代わり、ものを運ぶのに活躍するのがネコ車である。木造で手作り感豊かな手押し車は、町中で多く見られる自家用車だ。

まずは、西波止東部を歩く。幅2mほどの狭い道の両側に町家が続いている。町家は主に棧瓦葺きで、間口が2間から3間くらいで明治期のものが多い。屋根瓦は時代とと



町家の脇の路地「アワエ」は港に通じる



南船揚げ場付近から見た石積みの歴史的突堤 昔から島を荒波から守ってきた



港で網繕いをするたくましい漁師さん



島の共同井戸 いまも清水をたたえている 大ウナギが生息中



出羽島を愛してやまない「大生丸」船長の西和彦さん 「活性化も静けさも大事」とぼつり…

もにスレートやセメント瓦、鉄板葺きに変化している。しかし、出羽島の町家の特徴である「ミセ造り」が町家の表側（ファサード）に良く残っている。ミセとは端的に言えば板戸（雨戸）のこと。しかし、上ミセと下ミセの上下に分れており、それぞれ雨戸の他にも用途があるから面白い。上ミセは上方向に開き下屋の下にもう一つ庇が出来るように細工され、雨や日差しを遮る。下ミセは折り畳み式の足が付いており、下方向に開くと縁台に早変わりする。出格子とともに、伝統的な町家のファサードを彩る機能的な仕掛けである。

町家と町家の間には、先に紹介した「アワエ」が延びている。「アワエ」からちらりと見える港の空間がなんとも魅力的。思わず通りたくなりすり抜けた。狭く日影になったアワエから一歩出ると漁船が並ぶ港の風景が広がっていた。そこは西波止東部の町家の裏手で、今は立派なコンクリートの岸壁になっている。古写真によると、以前は玉石積みの護岸が築かれその下の砂浜に船が並んでいた。日差しが眩しい。見渡せば、緑濃い小高い丘を背景に水面や対岸の新町、洲鼻東部の町家の瓦屋根が輝いている。さらに右手奥には、入港時から気になっていた石積みの突堤が存在感たっぷりに鎮座し、漁村の文化的景観といった風情である。

新町から洲鼻東へ

新町は明治末期までには埋め立てられた地区で、町家が密集。その奥に本町等が広がっている。こちらは後でゆっくり訪ねることにして気になる存在である突堤に急いだ。

途中、若い漁師が網繕いする光景に遭遇し、漁業は健在だと実感。新町を抜けると道は海岸線に沿ってくねるように続く。途中で大きな共同井戸を見つけた。谷あいの奥にあるこの井戸は、昔から島の貴重な水源。覗き込んだら満々と清水をたたえていた。天然記念物の大ウナギが生息とあったが、残念ながらご対面とはならなかった。その代わり自転車で通りかかったご婦人と遭遇。「どこから来た？ この島の何処がいいの？」などと、職質(?)を受けた。よそ者はすぐ分かるのである。

急カーブした道を抜けたら目の前に午後の日差しに照らし出された突堤が現れた。手前にひとつ、その先、港の入り口の左右に規模の大きなものが両手を開いたように島を守っている。肌色の割石を積み上げた突堤は、明治期の築造である。当初は、玉石だったが後の修理で割石の間知石になった。コンクリート造とは違い、職人技を体感できる素晴らしい歴史的資産である。

突堤脇の浜を掃除している人を見かけた。お声を掛けるとなんと「大生丸」の船長さんである。仕事の合間を見て定期的に清掃していると言う。海岸清掃のボランティア活動の一環だとか。「島に惚れ込んで移住し、23年、静かでよいところ」と掃除の手を休め笑顔で話してくれた。

太陽が高いうちに急いで島の漁村が一望に見渡せる高台へ向かった。共同井戸脇に急な石段が青空を突くように伸びている。しんどいけれど傍らのツブキの花を愛でながらゆっくりと100段近く上がると台地に出た。小さな祠があり、かつての神社の境内らしい。しかし、周りは笹藪に



緩やかに弧を描く本町の町並み 美しい町並み景観が続く



「ミセ造り」出格子 デザインされた持ち送り等 町家の意匠は豊かだ



洲鼻西部の町並み 背後は丘で裾野に畑地が開けている



洲鼻西部には農家タイプの民家もある 生垣や納屋が織りなす風景



津波対策で建造された「タスカルタワー」からみた本町の町家群

▼「出羽島帆布工房」のお店は明治期の伝統的町家 製品が映える



覆われ漁村風景は見えない。仕方なく先へ進むと笹藪が途切れ、急に視界が開けた。そこは、段々畑のてっぺん。眼下には小さな港を抱くように瓦屋根の町家がピッチリと並び、その彼方には真っ青な太平洋の海原が広がっている。文句ない絶景。まさに南海の孤島を実感した瞬間である。

本町から洲鼻西部へ

恐る恐る石段を下り本町方面に戻った。話題の「出羽島帆布」を買うのだ。新町の路地を抜けて本町に入り、店を探したが見つからない。場所を訪ねたいが人がいない。しかも空家だらけ。やっとご婦人を見つけて尋ねると、この路地を出て左と教えてくれた。窓ガラスの奥に電球が見える伝統的町家が店だった。戸を引くと通り庭が奥に延び、両脇に帆布製品が並んでいる。「いらっしゃい」の声とともに女性が出て来た。前原さんから聞いていたので、話は早

い。ご主人の親戚筋の縁で島に移り住んで約10年。帆布製品は、ご主人の手作りによるものだ。奥様が草木染をされており、優しい色合いや生成り等、趣がある製品がミセの間や棚に陳列されている。帆布製品が伝統的な町家空間に



夕暮れの出羽島を後に 島影は存在感たっぷり



今宵の一献のメインの肴は地ものの鰯塩焼き

命を吹き込んでいるように思えた。「僕も帆布派」と手提げを披露し、お土産に生成りの大きめのバッグを買った。

さて、本町の町並みである。弧を描くように美しい町並みが続いている。間口が4間ほどの比較的規模の大きな町家が多く、「ミセ造り」や出格子、立派な持ち送り等を設けた町家が目を惹く。町並み景観としても優れている。

陽が傾き始めた。次に島の岬を廻り込んだ西側の洲鼻西部の町並みを訪ねる。再び新町、共同井戸、洲鼻東部、石積みの突堤の脇を抜けて島の西側に向かった。自然海岸に沿った道を左に曲がると、これまでの漁村とは全く違った民家が登場。生垣や前庭を設けた農家型のような。さらに道を進むと潮風が強く、背後の斜面地の照葉樹林を揺らしている。その麓に小さな畑地が開け、それに沿って瓦葺きの軒の低い町家がずらりと続いているのである。町家の間口は2間から3間くらい。小振りである。「ミセ造り」も見られ形態は同じだが、周辺は農村の様相である。小さく、狭い出羽島には意外にも漁村と農村が共存していた。

夕方の渡船の時間が近づいた。来た道に戻ると再び漁村である。斜光線で西波止境界の町並みが輝いている。牟岐港からの渡船の汽笛が聞こえ、真っ白な船体の「大生丸」が港に入ってきた。人が港に集まっている。毎日繰り返される島の日常風景がそこにはあった。小学校から船で帰って来た男の子が二人。大きな声で話しながら僕とすれ違いざまに「あっカバン買った」との声。「こいつの家、カバン屋」と付け加えた。するともう一人が「ありがとうございます」と深々と頭を下げた。でかい紙袋を下げている僕を見ての

一瞬のやり取りである。振り向くと二人は駆けながら手を振っている。思わず胸が熱くなった。

船長さんが自転車で港にやって来た。お巡りさんや宅配便のおじさん、仕事帰りの若い男女ほか、さまざまな人が渡船に乗り込んだ。港も町並みもすっかり薄暮に包まれ、短い汽笛を残して「大生丸」は出航。外海に出ると風が強く波もうねりも高い。夕焼け雲がたなびく真っ黒な出羽島がどんどん遠くなる。四国山地の山並みが迫り、牟岐港に無事接岸した。船長に笑顔でお別れの挨拶。お巡りさんからはお疲れ様と声を掛けられた。僕の一泊島民はこれでお仕舞いである。

今宵の一献、「英」への足はなぜか軽い。カウンターの隅に陣取り、大将お勧めの脂がのったメバチ刺しから開始。焼きはガラスケースの大ぶりの鰯と目があったのでこれに決めた。酒は、高知が近いからか? 「土佐鶴」のぬる燗。酔うほどに、出羽島の風景が次々と脳裏に浮かんだ。さらに過疎、空き家、重伝建、地域活性化、観光、定住、津波等、いろいろな文字が頭を過った。こんなに文字があふれ出てくる出羽島は可能性をたくさん秘めているに違いない。そしてそのヒントはあの男の子たちとの出会いにあったと感じた。

ふと、英国の鉱山町の空き家と活性化対策で、家具や織り、装飾品ほかさまざまなクラフトマンを優先的に住ませた事例を思い出した。この手は今や当たり前のようだが出羽島のロケーションがものをいう気がしてならない。

(地域遺産プロデューサー)